はじめに

「フリースクールとは何か?」を問われたとき、「不登校の子どもの通うところ」という答えが当たり前のように返ってきます。

確かにフリースクールに来ている子どもたちは、学校に行っていない（行きづらい）子どもたちなのですが……。

１９９７年、私たちは、その子どもたちと共に、安心で安全な「居場所」づくりを始めました。

学校に行けない目の前の子どもたちにとって、何が必要なのか？　彼らは何を求めているのか？　最初は手探りでした。しかし、子どもたちのしんどさに寄り添い、声なき声を聴き、子どもたちのニーズに応えて活動をしていくことで、心がほっとできる場がつくられていったように思います。

「おはようございま～す」と今日も笑顔でフリースクールに通ってくる子どもたち。同じ区内の子どももいれば、遠く電車を乗り継いで、市外から1時間以上かけて通っ

てくる子どももいます。しかも、鍵が開く10時よりも前から玄関前に並んでいる、そんな朝の光景が見られる「フリースクール ForLife」は、神戸市の西、漁港のある街の小さな学び場です。

現在11歳から15歳までの子どもたち11人ほどが通ってくるこの「居場所」は、日々ゆったりした時間が流れ、活気にあふれています。

フリースクールの数は、もともと全国に５００か所位と少なく、近年不登校の激増によって新たに設立するところも増えているようですが、追いつかない状況にあります。

一方、「不登校なんて許されない」「不登校は弱い人間がなるもの」という先入観をもっていて、フリースクールには通わないという話もあります。学校に行けない時点で不登校状態ではありますが、心理的なハードルが人それぞれにあるのだと実感します。こうした思いを抱えながら、家にこもる子どももいれば、フリースクールに「居場所」を見つける子どももいるということです。学校以外の選択肢がないという日本の教育の弊害が、子どもを追い詰めていると言わざるを得ません。一方、フリースクールでは「強制されないし、安心」と話す子どもや「自分らしくいられる」という声は、

よく聞きます。確かに学校には行きづらくても、フリースクールには毎日通えているのです。

訪問に来られる学校の先生や教育委員会の方々は、「これはいったい学校と何が違うのだろうか？」と一様に驚かれます。そんなフリースクールとはどんなところなのでしょうか？　わかりやすく言えば、ひとりひとりのありのままが受け入れられる、安心できて楽しい、やりたいことができるなど、子どもが元気になる要素があるところではないでしょうか。

そして、「学校にあるものが、フリースクールにはない」ということが、元気になれる理由だと思います。

ここには時間割はない。でも、皆で話しあう大切なミーティングの時間はある。

ここには大人からの強制がない。でも、子どもたちがつくるルールはある。

ここにはテストも点数もない。でも、子どもたちが自主的に学ぶ「学習の時間」はある。

ここには「先生」と呼ばれる人はいない。でも、同じ生きる仲間として大人がいる。

ここにはぜいたくな設備はない。でも、工夫を凝らした手づくりの生活空間が広がる。

ここには「いじめ」はないが喧嘩はある。でも、みんなで話しあって解決していく。ここには「ひとりぼっち」がいない。でも、1人ですごすことができる。ここには学年・クラスがない＝同年齢の子ばかりではない。でも、兄弟姉妹のような異年齢の優しい仲間がいる。

このようなことからもわかるように、公的支援もないなかで、子どもたちの学び舎フリースクールは、あるものを十分に生かし、ポジティブに物事を考えるようにしながら、不登校の子どもたちと共に歴史を紡いできました。支援する側、される側という立ち位置ではなく、生きとし生ける「仲間」として。

ところで、フリースクールでは何を学んでいるのか？　どのような活動が行われているのか？　については、その一片を、ＳＮＳを通じて発信はしていますが、十分に知られていないのではないでしょうか？

実は、そこで子どもたちは、学習や体験活動など、さまざまな活動に、自らが選択

しながら主体的に参加しているのです。フリースクールを理解していただくためにも、どのような活動があり、子どもたちがどのように成長していくかを知っていただくことが、「不登校」という概念、もしくは差別偏見に満ちた「不登校」の歴史に終止符を打つことにつながると考えています。

さて、子どもたちは、「ミーティング」という「自由に語れる時間と権利」をもっています。これは、フリースクールの活動の中枢となるもので、子どもにとっても大人にとっても大事な場です。子どもたちは「自由」について考えたり、自分たちの日常について気になることや一緒に考えたいことを話しあったり、あるときはルールをつくったり、と自分の言葉で自分の思っていることを皆に伝えます。自分の主張だけでなく、人の意見にも耳を傾け「そんな考え方もあるんだ」と刺激を受けたりするのです。「ミーティング」では、この場が皆にとってすごしやすい場になるように、楽しくすごすために知恵を出しあい、お互いの権利を侵さない民主的な「場」であることを実感します。ただ、ミーティングは強制ではありませんし、参加したくない子どもも出てきます。また、全員が意見を言えるわけではありませんし、むしろ人前で話

すことが苦手な人もいます。参加できない子の気持ちを理解しながらも、子ども同士で誘いあっている姿も見られ、私たちもその子どもが参加できるようになるまで「待つ」姿勢で見守ります。ある日を境に、折り合いがついて「今度からミーティングに参加するから」と言い、積極的にみんなのことを考えられるようになっていく子どももいます。

一方、大人も1票をもっているのですが、子どもたちは、大人の言ったことだから……と必ずしも受け止めるとはかぎりません。そこから、お互いが真剣に意見交換をする場面もあるのです。時には「交渉」ということも起こりえます。

また、この場は「対話」を大事にしています。カウンセリングではなく、子どもとスタッフとが、対等に話をじっくり聞きあう場面は、子どもにとってもスタッフにとっても気づきあえる意味のある時間です。

そもそも不登校という言葉は学校に行かない、あるいは行きたくても行けないという子どもの状態像ですが、学校のなかでも同じように困りごとを抱える子どもたち、

配慮の必要な子どもたちも同様に「生きづらさ」を抱えています。私たちは、フリースクールが、学校に行くとか行かないとか、障がいのあるなしに関係なく、十分に個々の力を発揮できるインクルーシブ教育の場としてやってきました。

スタッフたちの関わりも、スクール施設内において、いろいろな配慮がなされています。そういったことからも、お互いの違いを認めあいながら「学校外」の「学び場や育ちの場」として大きな役割を果たしていると思っています。

このような活動を通して、私たちはこのたび、フリースクールがいったい何なのか？どのような意味をもつのか？　を改めて考えていく機会となりましたが、今後フリースクールは何を目指してやっていくのか、ということも探求する機会になりました。

そこで繰り広げられる「学び」がどのようなものか？　のちほどご紹介しますが、これからの「学校教育」の在り方について、一石を投じることができるのか？　フリースクールならではのプログラムを通して、地域社会において何ができるのか？　もあわせて考えてみたいと思います。

１９８０年以降の歴史のなかでフリースクールは、時代の荒波に流されながらも、

その社会的意義を着実に確立していきました（やっと日の目を見た感すらします）。

そこには、子どもの数だけ多様な学びがあって、インクルーシブな場でありつづけ、子どもと共に追及したり、深めたり、広げたりしながら、学校教育を否定はしないけれども、「子どもの最善の利益」に沿って行動してきた足跡があります。

今後もさらに持続可能な教育を求めながら、地域とつながりあって、子ども主体の「民主主義の実践の場」になっていけたらと思うものです。

そして「教育機会確保法（※）」が２０１７年２月に施行されたが、それには、３年後の内容を見直すという附則がありましたが、５年経って尚、見直しの時期が遅れているようにも思えます。だからこそ、この期間に一層「居場所」の原動力をあらためて問い、フリースクールの果たしてきた社会的意義や教育の在り方を検証しつつ今後フリースクールは、新たな文化を生み出すことができるのかも考える機会になればと思います。

従来の学校教育では得られない、子どもたちの「生きる力」や「文化」を生み出す「学び場」になることを願いながら、学校以外の「選択肢」としてのフリースクール等オ

ルタナティブの教育の場が、しっかり社会に根付く「時」を待ち望んでいます。

※「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律（通称：教育機会確保法）」
２０１６年12月成立・公布　２０１７年２月施行

※「フリースクール白書」ＮＰＯ法人フリースクール全国ネットワーク編纂